

Title	松田道雄の医学・育児思想：その発想と論理
Sub Title	Matsuda Michio's philosophy on medicine and child care : its ideas and logic
Author	和田, 悠(Wada, Yu)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2005
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.98, No.3 (2005. 10) ,p.521(145)- 540(164)
JaLC DOI	10.14991/001.20051001-0145
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20051001-0145">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20051001-0145</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

松田道雄の医学・育児思想

——その発想と論理——

和田 悠

（初稿受付 2003 年 9 月 25 日、  
査読を経て掲載決定 2005 年 8 月 23 日）

はじめに

戦後日本の医学思想史・育児思想史は、「からだ」と「子ども」をめぐる社会問題が深刻化している今日、重要な研究領域として浮上している。なかでも医療や育児のような「生命」に関わる営みの側から「戦後」とはどういう時代であったのかを、高度成長の時代をも含めて社会史的な文化史・思想史として考察することは、今後本格的に展開されるべき重要な課題である。本稿はこうした課題に接近する第一歩として、松田道雄の医学・育児思想の展開をスケッチすることを課題としている。

松田道雄（1908～1998 年）は、「医療・育児・教育から社会・政治問題まで戦後民主主義思想の旗手として積極的な評論活動を展開した」知識人であった。多岐の分野にわたる著

作群は、①本稿で検討する医学・育児論、②『社会主義リアリズム』（三一書房、1958 年）、『ロシアの革命』（河出書房新社、1974 年）に代表されるロシア革命論、③『日本知識人の思想』（筑摩書房、1965 年）、『在野の思想家たち—日本近代思想の一考察』（岩波書店、1977 年）に代表される日本社会主義・マルクス主義研究、④『京の町かどから』（朝日新聞社、1962 年）、『われらはいかに死すべきか』（暮しの手帖社、1971 年）といったエッセイ・人生論の 4 つの系列に整理することができる。

第 1 の系列である医学・育児論として有名な著作は、『私は赤ちゃん』（岩波新書、1960 年）、『私は二歳』（岩波新書、1961 年）、『育児の百科』（岩波書店、1967 年）である。これらは、松田道雄の代表作であるばかりか戦後日本を代表する育児書であり、育児をする多くの親に迎えられ、読み継がれた。そのために知識人である松田道雄の死は、マスメディア

(1) 『朝日新聞』1998 年 6 月 3 日「松田道雄氏が死去」。

上で鶴見俊輔や多田道太郎といった「同業者」によって追悼されるに留まらなかった。訃報以降の各新聞社の投書欄をみると、松田の育児書で子育てを経験した多くの女性が「松田道雄先生」と呼びかけ、身近な人を亡くしたような気持ちでその死を悼んでいる。ある知識人の死が、新聞の読者大衆にこうした感情を惹起させるのは松田道雄の場合以外にはそうはないように思われる。

医学、育児に関する執筆活動を通して松田道雄の思想が日本社会に与えた影響は計り知れない。それは、世代を超えてという意味で時間的広がりを持ち、人びとの暮らしにまで及んでいたという点で深さを持つといえよう。こうしたところに、戦後日本の知識人としての松田道雄の独自の位置がある。それゆえ、戦後史のなかで松田道雄の思想を受容の側面をも意識して検討すること自体が、戦後日本社会を議論することになる。こうしたこともあり、近年は松田道雄への関心が高まり、研究が始められている<sup>(2)</sup>。

ところで、松田道雄の医学・育児思想の展開を素描するにあたって留意したいのは、次の2点である。1点目は、松田道雄の医学・育児思想における発想と論理について戦時・戦後の連続とその後の転回に着目することである。松田道雄の医学・育児思想についてこれまでの議論では、医者と患者の相互信頼こそ

医療の前提であるという医学・育児思想の一貫性が評価されてきた。それに対して本稿では、医学・育児に関するテキストを時系列的に検討することで、戦時から連続している医学思想が、松田の戦後の医療実践と思想的営為のなかでとらえ返される局面に焦点をあてたい。

2点目としては、松田道雄が医者としてのみならず知識人として、自らの実存を積極的に規定していたことである。戦後は自由診療の小児科を開業する一方で、論壇では積極的に評論活動を展開し、岩波書店や筑摩書房といった出版社と強い関係を持ちながら著作活動を行ってきた。松田にとって医学・育児に関する評論活動は、知識人としての啓蒙活動の一環としてあったのである。知識人としての松田道雄の思想と行動に留意すること。この点が医学・育児思想を考察するうえでも重要だと考える。

ただし、医学・育児思想の思想的転回を松田の医療実践や同時代に振幅を示した育児思想状況とのかかわりで内面的・動態的に叙述することは本稿に続くべき今後の課題とし、ここでは松田によって書かれたテキストをとりあげ、1940年代、50年代、60年代という時期区分を設定し、それぞれの時期での医学・育児思想の発想と論理を明らかにする。こうした作業を通して、思想的転回をそこに見出

---

(2) こうした視点からの松田道雄論として、桜井哲夫「子どもに自由を一松田道雄の仕事」(同『可能性としての「戦後」』講談社、1994年)、新藤謙『「明治的支配」と市民思想—暗い夜を前に松田道雄を読みかえす』(田畑書店、2002年)がある。また、幼児教育学の立場から松田の育児関連書にみられる育児思想を分析したものとして、大森隆子「松田道雄の育児思想について (I)~(VI)」(『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』第17号~22号、2000年~2005年)。

すことに本稿の課題を限定したい。本稿が扱う時期は、松田が開業医を引退し、それまでの医学、育児論の集大成ともいべき『育児の百科』を出版する1967年までとする。

## I 医者としての履歴と著作活動

### (1) 松田道雄の戦前・戦時経験<sup>(3)</sup>

はじめに、1967年に開業医を引退するまでの履歴を、教育経験に焦点をあてつつ一瞥しておきたい。松田道雄は、1908年に父道作、母のぶの長男として茨城県に生まれた。松田家は医者の家業としており、道作は松田家の次男であった。道作は旧制第一高等学校を経て京都帝国大学医科に進学し、1906年に卒業した。1909年には、京都帝国大学に狂犬病研究室の主任として赴任することになり、それを機に一家は京都に移り住んだ。それ以降、戦時下の一時期を除いて松田道雄は京都で生活を送ることになる。

道作は、1913年に「松田小児科診察所」を開業する。松田道雄は、開業医である父と専業主婦である母に育てられた。松田は大正デモクラシーの時期に、都市新中間層の子どもとして主体を形成していったのである<sup>(4)</sup>。1915年に京都市内の明倫小学校に入学するが、そ

こで大正自由教育を経験することになる。明倫小学校では、山本鼎が提唱していた自由画教育や自由選題による生活綴方教育が実践されていたのである。1921年に、京都第一中学校に進学する。受験勉強のために松田には勉強部屋が用意された。松田はこの時期を回想して、「母は私に台所のことを手伝わせなかった。日用品を買いにいかせなかった。年末で来客で妹たちが、ふだんさせられない仕事によばれている時でも、私は自分の部屋で本をよんでいてよかった<sup>(5)</sup>」と述べている。この断片からは、父、母、子ども（兄弟姉妹）の性別役割分業が明瞭であった都市新中間層の家族のなかで松田が成長したことがうかがえる。

松田の子ども時代の読書傾向についても言及しておきたい。松田が小学校4年生であった1918年に、鈴木三重吉によって『赤い鳥』が創刊される。都市新中間層の子どもを表象し、大正自由教育の童心主義や個性尊重を基調とした雑誌であるが、松田はめったに読むことがなかったという。その代わりに愛読していた雑誌は『良友』という少年雑誌であった。回想によれば、吉野幹夫というフランスの飛行将校の遺児が活躍する連載を待ち望み、待ちきれないで発行日が近くなると、何度も足をはこんだという。『良友』は、『少年倶楽

---

(3) 以下の基本的な事実関係は、読書経験を振り返るかたちで書かれた自分史である松田道雄『私の読んだ本』（岩波新書、1971年）および、幼少期の記憶をたどりながら、当時の京都の風俗と自らの成育過程を描いた『花洛—京都追憶』（岩波新書、1975年）による。後者は、改版され『明治大正 京都追憶』（岩波同時代ライブラリー、1995年）として再刊された。

(4) 都市新中間層の子どもである松田の教育経験の歴史的 성격については、大門正克『民衆の教育経験—農村と都市の子ども』（青木書店、2000年）、第4章「都市の子ども像の輪郭」を参照。

(5) 松田道雄「日常への回帰」（『松田道雄の本 12 私の手帖から』筑摩書房、1980年）、241頁。

部』と同じ系譜に属する雑誌であった。それは少年の向上心に訴えて立身・英雄主義を強く鼓舞するものであった。とはいえ、松田が「ブルジョア」世界に住み、「よい子」の範疇に属していたことは否定できないだろう。大門正克は、東京府中野町の桃園第二小学校の子どもを事例にして、1920年代から30年代かけての都市新中間層の子どもの姿に、規律を守り、次代の国民として育ち、「純粋・無垢」であって、受験勉強に励むという4つの輪郭を見ている。こうした子どもの姿は、松田にもまた認めることができる。さらに大門は、都市新中間層の子どもは「よい子」を基準にして他者への優越意識をもつ傾向にあったことを指摘している。松田のなかに生涯根強く存在した啓蒙主義は、都市新中間層の子どもとしての教育経験によって培われた側面があるように思われる。

中学校に進学すると、自我や内面世界、宗教的世界といったものへと興味関心が向かい、1年生の時に、倉田百三『出家とその弟子』を読んでいる。3年生の時に、小学校以来の友人の死を契機に生きる意味を「聖書」に求めて教会にも通った。こうした教養主義、人道主義的な雰囲気の中に松田はいた。

ところで、当時の旧制中学校の修学年限は5年であった。ただし、松田の時代には、4年生の段階で旧制高等学校の試験を受験できた。いわゆる「飛び級」である。松田はこの制度を利用して、1925年に医学部の進学コースである理科乙類に進学した。そして、松田がこ

の時期に出会い、生き方の規定的な部分で影響を受けることになったのが作家の有島武郎である。有島がクリスチャンであることから、関心を寄せはじめた。松田によれば、有島の「私は私のもの、私のただ一つのもの。私は私自身を何者にも代え難く愛することから始めねばならない」という言葉はその後の信条になったという。

大正デモクラシー期の精神状況を分析した藤田省三は、有島の思想的営為を「徹底した自己限定こそが却て自己の尊厳を社会から取り返す道であること」<sup>(6)</sup>を示したものとして評価している。藤田によれば、有島のいう「自己限定」とは、友達や偉人や聖書や教会のような「外部の標準」に合わせて「努力」するような日本的な道徳主義・修養思想主義ではなかった。いずれにしろ、こうした時代背景のなかで思想形成を始めた松田には、自己の存在意味を超越的なものとのかわりにおいて確かめる、いわば「自己超越の発想」というべきものが存在していた。こうした自己認識の発想と方法は、後に「福本イズム」を受け容れる基盤ともなっていた。

松田の自己申告によると、マルクス主義者として自己を意識したのは、1927年9月、高校3年生の時分であった。エンゲルス『反デューリング論』および福本和夫『社会構成＝並びに変革の過程』の読書経験が決定的だったという。マルクス主義は、有島の思想とは異なり、世界を解釈するだけでなく変革し得る理論でもあった点に、松田は思想的優位性を

(6) 藤田省三「大正デモクラシー精神の一側面—近代日本思想史における普遍者の形成とその崩壊」(『藤田省三著作集 4 維新の精神』みすず書房、1997年)、103頁。

認めたのである。

ここで指摘すべきは、松田が同時代に経験したマルクス主義の歴史的な性格である<sup>(7)</sup>。マルクス主義による真理とは、人間の主観的意識から独立した客観的に実在する絶対的なものであると考えられていた。こうした真理観は、ロシア革命を成功させたコミンテルンの政治的権威による「正義」とわがち難く結ばれていた。また、「福本イズム」についていえば、現在の生活を超越して行くような観念の体系であるという点で超越主義的な性格を持ち、学習しさえすれば誰にでも修得できるとする点で理論としての技術的合理性を有していた<sup>(8)</sup>。学校秀才型の制度通過型エリートであった松田にとって「福本イズム」は、受け容れやすい「社会科学」理論であったといえよう。さらに理論の性格とは別に、同時代の青年にとってマルクス主義とは禁欲的な生き方を可能にする方法、すなわち自らの生き方を律する「倫理」でもあった。松田もまたこうした側面においてマルクス主義を受容していたことも指摘しておきたい。

1928年4月に京都帝国大学医学部に進学すると、松田は共産党員の医学生が多く所属していた「読書会」に参加し、マルクス主義を「学習」する機会をもった。そこでは、コ

ミンテルンの『無産者政治教程』などが教科書として使われた。回想によると、読書会に参加し続けたものの、そこでなされた「社会主義型読書」ともいべき公式学習にはなじめなかったという。先に述べたように、松田は都市新中間層の子どもであり、「古今東西の文化に通じた教養的読者」としての読書経験をもっていた<sup>(9)</sup>。こうした豊かな内面世界を持ち得たこともあり、奉公滅私の価値観を内在していた同時代の共産主義運動に対してなんらかの違和感を意識の根底の部分では抱いていたと思われる。当時「プチブル」「小市民」的性格と称される「私」を滅してまで党に献身することは松田にはできなかったのであり、換言すれば、共産党のシンパサイザーにはなるが、入党することはなかったのである。とはいえ、松田はマルクス主義の理論的正当性を疑うことはなく、マルクス主義者として自己を規定していたのである。

1932年に大学を卒業すると、医学部小児科医局の無給副手として入局した。松田は共産主義運動に関わった関係で、大学時代に逮捕歴があった。そのため、父の道作が小児科医局出身であるという関係で入ることが許された小児科以外に選択肢はなかった<sup>(10)</sup>。ところで、「読書会」のメンバーの多くは、卒業後に無産

---

(7) この点については、安田常雄「マルクス主義と知識人」(『岩波講座日本通史 18 近代 3』岩波書店、1994年)を参照。

(8) 「福本イズム」に関しては、『藤田省三著作集 2 転向の思想史的研究』(みすず書房、1997年)も参照。

(9) 「古今東西の文化に通じた教養的読者」、「社会主義型読書」という類型化は、永嶺重敏『モダン都市の読書空間』(日本エディタースクール出版部、2001年)による。

(10) 松田道雄『松田道雄の本 16 若き人々へ』(筑摩書房、1980年)、255頁。

者医療運動に従事していた。なかには自殺に近いかたちで過労のために倒れていった同窓生もいた。1920年代から30年代にかけてマルクス主義を経験した者にとって、マルクス主義者であることは書齋の世界に留まるものではなく、非合法活動への参加を意味していた。それに対して松田は、1929年10月に湿潤性髄膜炎を患ったことを理由に、それ以降は党にカンパをすることはあっても実践活動に身を置くことはしなかった。松田は良心的な医者になることに生きる道を定めようとしたのである。こうした松田の選択には、無産者医療運動に従事した「読書会」メンバーに対する原罪意識の側面と、あくまでも医学的知識を媒介にして人民に献身しようとする知識人としての高度な自覚という側面とを見ることが出来る。医局では、小児結核の研究を進めた。小児科のあつかう死亡率の高い病気のうちで、疫痢や腸炎とは異なり医学的な努力を必要とするものは「結核性脳膜炎（髄膜炎）」であったからである。結核は社会的貧困に根ざした病気であり、松田にとってそれを専門にすることは、「ふつうの医者」になるのではなく、「プロレタリアート」に役にたつ仕事をするという意味がこめられていた<sup>(11)</sup>。

1937年に医局を出て、京都府衛生課の管轄である西ノ京健康相談所に赴任する。1943年に、和歌山県内政部衛生課長に転出するまで

在任した。松田は、総力戦体制下の衛生行政を末端で支える技官の位置に身を置くことになったのである。松田は医局内で小児結核の研究をすすめるなかで、小児結核と成人結核の関係を問題にした。それは、結核は初感染で生じるのか、それとも再感染で生じるのかという問題であった。大学病院の小児科には、重篤の結核の子どもが担ぎこまれてくることが多く、成人の結核は内科の管轄となっていた。医局では解決できない問題を抱えたときに、松田に赴任の話が持ち上がった。自身の結核研究をすすめるうえで、健康相談所は定点観測のできる格好の場所であった。

松田は健康相談所に赴任してはじめて、「底辺の生活というものを知った。それを善良な人たちが、どんな思いで支えているのかも知った<sup>(12)</sup>」と述懐している。ここに来てはじめて松田は、具体的な民衆と接点を持つことになったのである。そして、医学的な努力だけでは限界があることを痛感させられた。換言すれば、結核を本格的に予防するためには、医学や医療を社会との関係で把握しなければならぬことを再認識させられたのである。松田は当時を回想して、「過労と貧困が結核をつくりだしていることがわかっているのに、自分のやっている「結核予防」のしらじらしさはほとんど絶望的であった<sup>(13)</sup>」と述べている。また別の文脈では、当時の気分を「とにかく生

---

(11) 医局時代の思想と行動については、松田道雄『結核とのたたかひの記録』（白東書館、1948年）も参照。

(12) 松田道雄『私の読んだ本』（岩波書店、1971年）、15頁。

(13) 松田道雄『京の町かどから』（朝日新聞社、1962年、引用は筑摩書房、1968年）、179—180頁。

きてさえいれば、また何とかなるに違いない。資本主義社会は倒れるに決まっているという必然性を知っているだけ、肉体を保存するということは無意味ではなかった<sup>(14)</sup>と回想している。

松田は1940年に、最初の著作『結核』を弘文堂の教養文庫の1冊として出版する。戦時下の結核予防の実態に絶望しながらも、「それでも理性と真理とが支配する世界があるにちがいないということを、みずからにいいきかせるつもりで『結核』にとりかかった<sup>(15)</sup>」という。『結核』は文部省推薦図書になったことも手伝い、2年間で3万もの読者を持つことになった。社会医学を志向する医学部生にとって、高橋実『東北一純農村の医学的分析』とともに導きの書であった<sup>(16)</sup>。

和歌山県内政部に転出してからは、3か月も経ないうちに召集された。そして、陸軍病院の軍医として2年半の兵舎生活を経験する。戦後すぐに官職を辞し、1947年には京都市今出川室町に「松田小児科診療所」を開業する。町の小さな小児科医院であった。1967年に引退するまでの約20年間、保険医の指定を受けることなく自由診療の方針を貫いた点で稀有な町医者でもあった。

## (2) 松田道雄の著作活動

つぎに、戦後から1967年までの医学・育児

に関する主要な著作を概観しておきたい。戦後に最初に書かれた著作は、1947年3月に中央公論社から出版された『人間と医学』である。民主主義科学者協会の阪神支部の例会で「日本の医学の低さについて」という講演をしたものを、久野収の骨折りで本にまとめたものである。松田は「はしがき」に「前に出した「結核」(教養文庫)に病床から声援して下さったかた—その人たちが健康でいて下さるように—への返事になってほしいもので<sup>(17)</sup>す」と記している。

1949年には、戦時下に著した『結核』の改訂増補版が出版されている。1940年版は松田曰く「色ぬき」のために、本の扉に1939年に出された「皇后陛下ヨリ賜ハリタル令旨」を掲載していた。それに対して増補版では、この箇所が削除され、附論「結核に関する最近の進歩」がつけ加えられたが、本文には若干の加筆修正も加えることがなかった。松田が戦前からの自らの医学的立場、医学思想の一貫性を意識していたことが、こうした点からもわかる。松田の医学認識は、敗戦を機に転回することはなかったといえよう。

ところで、自由診療の町医者である松田にとって医学・育児に関する評論活動は、家計を補助する手段でもあった。松田が多作であるのは、こうした事情も手伝っている。その内訳をみると、1950年代半ばまでは結核に関

(14) 松田道雄「通信第一号 転向と肉体」(思想の科学研究会編『共同研究 転向 上』平凡社,1959年)。

(15) 前掲『京の町かどから』,180頁。

(16) 前掲『京の町かどから』,183頁。

(17) 松田道雄『人間と医学』(中央公論社,1947年),4頁。



する著作が多い。そのいくつかを挙げると、『結核をなくすために』（岩波新書、1950年）、『療養指導—結核と社会』（弘文堂、1951年）、『療養手帖』（創元手帖文庫、1951年）、『結核はみんなで治そう』（未来社、1952年）、『子供と結核—防ぎ方と治し方』（大日本雄弁会講談社、1952年）、『結核について思うこと』（創元社、1953年）、『療養の設計』（岩波新書、1955年）、『宛名のない見舞い状—療養者のために』（六月社、1956年）がある。結核に関する最後の著作は、1956年に出版されているが、結核による死亡率は、1955年を境にして減少する。医学の発展により化学療法が可能となり、結核は治癒し得る病気になっていったからである<sup>(18)</sup>。

育児については、『赤ん坊の科学』が1949年に出版されている。毎日出版文化賞を受賞したこの著書は、思いかげない多数の読者を持つことになり<sup>(19)</sup>、1952年、1955年、1960年と改訂されている。また、羽仁説子と共編の『新しい育児百科』（日本評論社）は1950年に出版され、1960年に改訂新版（博文社）が出されるまで、70版を重ねている<sup>(20)</sup>。1950年代後半からは、結核に関するものと入れかわる形で、育児に関するものが増え始める。たとえば、『育児日記』（文藝春秋新社、1957年）、『はじめての子供』（中央公論社、1958年）が出版されている。

1960年には岩波新書として『私は赤ちゃん』が刊行され、その続編『私は二歳』が翌年にまとめられる。1963年には『新しい保育百科』（新評論）を編集し、集団保育を提唱する。1965年には風習としての育児に関心を寄せて、『日本式育児法』（講談社現代新書）を著し、開業医を引退する1967年には、『育児の百科』（岩波書店）を刊行した。その内容は、戦後に展開した松田の育児論の集大成でもいえるべきものであった。

## II 近代医学思想と医者としての啓蒙主義 —1940年代

はじめに『人間と医学』（中央公論社、1947年）をとりあげ、この時期の松田の医学認識を確認しておきたい。

当時の松田は、医学を「人間の病気をなくしてしまうための学問」として素朴に把握しており、「病気がなくなれば医学はいらなくなる。だから医学の目的は医学自身をいらなくすることにある<sup>(21)</sup>」と考えていた。別のところでは「病気をこす自然の法則をとらえて、それにしたがって病気をなおすのに今日自分の力がたとえたりなくてもあすあとからくる人間は自分をふみこえてやがて病気をなくしてしまうだろう<sup>(22)</sup>」と述べている。また、医学の進歩を阻むものとして「まじない」や「封建制度のくびき」を指摘している。ここでいう

(18) 小松良夫『結核—日本近代史の裏側』（清風堂書店、2000年）、15—18頁。

(19) 前掲『私の読んだ本』、181—182頁。

(20) 『朝日新聞』1960年6月6日付（夕刊）。

(21) 前掲『人間と医学』、9頁。

(22) 前掲『人間と医学』、29—30頁。

医学の進歩とは、医学の近代化と言い換えられるものであった。こうした松田の発想と論理は、主体と客体との分裂に近代の指標を求め、日本社会の封建的性格を克服することで近代化を実現することを課題とする同時代の知的状況に適うものであった。<sup>(23)</sup>

さて、こうした医学認識は、医者としての強烈な使命感と啓蒙主義を用意するものでもあった。松田は『人間と医学』のなかで、「えらばれた人間として自分は受難者のまえにたっている。(中略)自分の今日あゆんでいる道は正しい医者が通るべきただ一つの道であることだけは<sup>(24)</sup>いえる」と述べている。当時の松田は、医学的な努力を通じて医学に関する認識を積み重ねていき、それを広く啓蒙することに医者としての生きる意味を見出していた。それは、医学の進歩に貢献する生き方として、絶対的な善として肯定されていたように思われる。

こうした医学思想の基礎にあったものとして、国家によって相対化されえない「生命」に対する松田のこだわりを指摘できる。松田は『結核』のなかで、「今日、結核と国民との闘いで最も重要なことは、それが高価であることの認識である。それも結核によって国家から失われてゆくものよりは安価である<sup>(25)</sup>」と述べている。『結核』が戦時下に執筆されているこ

とを考えると、松田のこうした文章の断片には戦争への「抵抗」を読みとることができよう。しかしながら、この段階の松田には「生命」を一人ひとりの患者個人の固有性において考える志向性が弱かったこともまた事実である。たとえば、『結核』のなかには、「自分を救い得ない今日の科学を、明日隣人を救い得る科学にするため生の最後の日まで自己の苦悩を資料として科学にささげている患者のためにもあくまでも科学的に結核を語らねばなら<sup>(26)</sup>ぬ」というような表現もあり、患者を「素材」として扱うまなざしもまた垣間見ることができる。

さらに、『人間と医学』のはしがきには、「個人としての苦痛を人に語るのは見苦しいことですが、医者としての個人的な苦しみも、実は人民の苦しみが医学という面にあらわれたにすぎないことがわかってみると、この苦しみを医者の精神の改造だけで解決しようという試みには承服しかねます。医者としてやり切れないものを何とかすることのできるものは、人間としてやり切れなくなった人民よりほかにないはず<sup>(27)</sup>です」という一節がある。この引用の後半部からは、医学の近代化を進める変革主体として「人民」が生まれてきたところに、戦後の医学が置かれている新しい歴史的条件を認めてそこに期待を寄せていることが

---

(23) たとえば、飯塚浩二・瓜生忠夫・大塚久雄・川島武宜・中村哲・野田良之・丸山眞男による座談会「新学問論」(『潮流』1947年1月)は、当時の知的枠組を典型的に表わしている。

(24) 前掲『人間と医学』、29-30頁。

(25) 松田道雄『結核』(弘文堂書房、1940年)、112-113頁。

(26) 前掲『結核』、1頁。

(27) 前掲『人間と医学』、3頁。

わかる。もっともこうした人民観には、二・一ゼネスト前夜のマルクス主義者の楽観を見ることもできよう。また引用の前半部では、「医学という面にあらわれた人民の苦しみ」という言い方で患者個人の苦しみを包摂して理解していることがわかる。先に『結核』の断片に即して指摘したように、こうした表現には、患者を「素材」として扱うまなざしを見出すことができる。

ところで、これまで検討してきたのと同じ時期に、松田は『赤ん坊の科学』という育児書<sup>(28)</sup>を世に送り出している。1949年に、大阪の創元社から出版されたもので、京都にいる小児科医が地方の医療設備の整っていない場所に住んでいる母親にあてて手紙を書くという形式で著されたユニークなものであった。『赤ん坊の科学』という書名には、当時の日本社会の知的状況が表現されている。敗戦後の日本社会にあって「科学」という言葉は、近代化や生活改善を連想させるものであり、「進歩」と結びついた肯定的な意味を含んでいたのである。

ところで、戦後初期に出版されていた育児書は、依然としてドイツ小児科学に基礎を置くものであった。そうしたなか松田は、京都の四条烏丸にあったクルーガー図書館に往診の途中に通い、「戦争中にアメリカ小児科学

がどんな方面に新しい分野をひらいていった<sup>(29)</sup>か」を解説することを意図して『赤ん坊の科学』の執筆に取り組んだ。近代化の象徴でもあったアメリカの育児知識の啓蒙的な紹介は、当初は小児科医や保健婦を念頭に置いたものであった。しかし、戦後庶民のあいだに広がった「アメリカニゼーションへの憧憬」(安田常雄<sup>(30)</sup>)にも支えられて、予想に反して若い母親のなかに広い読者を持つ結果になった。

その例証として、ここでは出産に関する記述を見ておきたい。『赤ん坊の科学』のなかで松田は、「お産を自宅で行うか、入院してやるかは、私たちのおかれている状態では一がいにきめてしまえません。設備のわるい不潔な病院で、なれない医者のもとでお産をするより、勝手のわかったきれいな自宅で、なれた産婆にきてもらってやるほうが良いといった具合です。(中略)理想をいえば、すべてのお産は、設備の良い病院で、なれた医者のいるところでしたほうが良いにきています。アメリカで、白人にくらべて黒人にお産のときの不慮の死が多いのは全く産院でお産をせず、自宅でするからだと言われています<sup>(31)</sup>」と書いている。

上記の記述を読めば、松田が同時代の日本社会の状況に配慮して、一方的に「産婆」を非科学的な存在と決めつけてはいないものの、

---

(28) 該期の松田道雄の育児思想と『赤ん坊の科学』の位置づけに関しては、横山浩司『子育ての社会史』(勁草書房、1986年)、234-242頁を参照。

(29) 松田道雄『赤ん坊の科学』(創元社、1949年)、150頁。

(30) 安田常雄「アメリカニゼーションの光と影」(中村政則・天川晃・尹健次・五十嵐武士編『戦後思想と社会意識』岩波書店、1995年)。

(31) 前掲『赤ん坊の科学』、17頁。

アメリカの育児をひきあいに出して「お産」の施設化を松田が理想として強く打ち出していることがわかる。戦後のGHQによる衛生行政は、「産婆」の手による自然分娩ではなく医師と産科看護婦による計画分娩を、啓蒙されるべき科学的な「お産」のスタイルとして制度的に普及させようとした<sup>(32)</sup>。松田もまたそうした科学・医学思想の潮流の外にはなかったのである。戦時下の貧困のなかで医療実践にたずさわってきた松田にとって、アメリカの育児事情は憧憬的であったといえよう。

ここで、『赤ん坊の科学』にみられる医学、育児思想について2点ほど指摘しておきたい。

第1に「科学」に対置されたのは、「風習」や「知恵」であった。それらは、伝統的な「迷信」として否定されるべきものであった。松田は『赤ん坊の科学』のなかで育児は若い世代の母親によって担われるべきであると主張した。この主張は同時代の文脈では、封建的な家制度への批判と共振するものであった。ちなみに、松田は1948年に大雅堂の新少年文庫に『からだところろ—おばけ退治』という本を著している。そのまえがきには「わたしたちの、おじいさんやおばあさんは、わたしたちのように、自由に、かんがえたり、かんがえをはなしあったり、できませんでした。お

じいさんや、おばあさんが、かしこくなかったから、おばけを信じていたのではありません、おじいさんや、おばあさんが不自由な、くるしい、不しあわせな世の中にすんでいたから、おばけのような、まちがったかんがえを信じるようになったのです<sup>(33)</sup>」とある。この引用からは世代を軸にして、端的に「おじいさんやおばあさん」を迷信の側に振り当てていることがわかる。この時期の松田には、家が有している育児文化の伝承機能への着目はなかった。むしろ、それは自明なものとして存在していたともいえよう。また、育児の近代化が理想的に実現されているアメリカを模倣すべき対象として設定し、近代化が遅れて改善されるべきものとして日本の育児が言及されるという記述スタイルが見られることも改めて確認しておきたい<sup>(34)</sup>。

2点目は、小児科医や保健婦を読者層に想定したからであるが、学術論文のように出典を註で明記したうえで、乳児の栄養や伝染病の予防についての最新の統計的データを頻繁に引用していることである。1960年代以降の松田の育児書には、「統計」や「標準値」が全くといっていいほど掲載されないことは対照的である。松田には、戦後の「栄養失調と肉体の危機」<sup>(35)</sup>（鹿野政直）の時代にあって「統

(32) 天野正子「「解放」された女性たち—「男女五五年体制」へ」（前掲『戦後思想と社会意識』），242—245頁。

(33) 松田道雄『松田道雄の本13 いいたいこと・いいたかったこと』（筑摩書房，1980年），202頁。

(34) 1952年に改訂された『赤ん坊の科学』のあとがきのなかで、松田は1948年の執筆状況を回想して「『赤ん坊の科学』は戦争によって立ちおくれた日本の育児の学問を、すこしでも諸外国に追いつかせたいと思って書いた」（傍点、引用者）と述べている。引用は、前掲『いいたいこと・いいたかったこと』，207頁。

(35) 鹿野政直『健康観にみる近代』（朝日新聞社，2001年）。

計」と「標準」による育児こそ、啓蒙されるべきものであると考えられていた。それは実証的という意味で、タイトルにあるように「科学」的育児であるとみなされたのである。

### III 患者の視点の獲得 ——1950年代

1950年代は、松田道雄の医学・育児思想における転回期であった。一般的に戦後日本の知識人にとってこの時期は、戦後初期の素朴な啓蒙主義に対する一定の批判や反省がなされた時期であった。また、戦後に出発した社会運動と接点を持つなかで知識人としての立場と役割が改めて問われる時期でもあった。松田の場合もまた、より正確に言えば1950年代半ばごろから、前節で指摘した患者へのまなざしを問い直しはじめた。ここに、松田道雄の医学思想の転回が生まれたのである。以下では、その転回過程を素描したい。

1950年に、岩波新書として『結核をなくすために』が出版されている。松田は1949年3月に創刊された、結核療養者を読者とした雑誌『健康会議』の巻頭に置かれた「療養指導」欄に連載を持っていた。この新書は、創刊号から12月号までの連載原稿を加筆修正してまとめたものである。『健康会議』は、全国療養所の患者自治体連合である日本患者同盟の機関誌であり、編集スタッフは北錬平、宮本

忍、島村喜久治といった社会医学の視点から結核に取り組んできた医者たちであった。日本患者同盟は、1948年に療養所の待遇改善を要求して団体交渉する運動のなかから組織された患者による自治団体である。戦前には患者の自主的な組織はなく、療養者の組織化は、戦後に固有の社会運動であったといえる。<sup>(36)</sup>

『健康会議』での松田の評論は、読者に深い印象を残したようである。ある療養者は、「巻頭文を連載していた松田道雄氏の『結核と社会矛盾』には大きく啓発された<sup>(37)</sup>」ことを回想している。結核が資本主義社会の矛盾の所産であるという理解は、戦前から一貫して松田に存在した。『結核をなくすために』のあとがきでは、「現在の結核の病人が苦しんでいるさまざまな問題は、結核菌と人体の争いだけでなく、日本の社会のあり方とわがちがたく結びついていることを明かにしたかったのである<sup>(38)</sup>」と述べている。

医学認識についても同様で、1950年代前半の松田にとって、医学の進歩は自明のものとしてあった。医者としての強烈な使命感と啓蒙主義、患者へのまなざしもまた変わることはなかった。1951年に『健康会議』に寄せた文章をまとめた『結核はみんなで治そう』には、「最高最新の治療といえども、それが進歩を示すかぎり若干の過誤はあるのだ。誤りをしないというのは何もしい人だけだ。新し

(36) 日本患者同盟については、日本患者同盟四〇年史編集委員会編『日本患者同盟四〇年の軌跡』（法律文化社、1991年）に詳しい。

(37) 前掲『日本患者同盟四〇年の軌跡』、283頁。

(38) 松田道雄『結核をなくすために』（岩波新書、1950年）、162頁。

い外科手術で思わなかった余病が出たとしても、そのために医者 of 良心を疑ったりするのは幼稚だと思う」という記述があり、さらに医療事故に関しては「それは、それとしてにない、耐えることが進歩を容認するものの態度ではないか<sup>(39)</sup>」と患者に対して呼びかけている。こうした文章から当時の松田は、あくまでも医者 of 立場から発想し、医学 of 進歩を第一義的に考えていることが見えてくる。この時点では、医者 と患者 of 非対称的な権力関係は松田 of 視野には入っていない。

ところが 1950 年代半ば以降になると、これまで指摘した患者へのまなざしに変化が現れる。それにともない、医者としての強烈な使命感と啓蒙主義に反省が加えられるようになるのである。

松田は 1955 年に、化学療法についての紹介を主題にした『療養の設計』を岩波新書で出版している。興味深いことに、丸山眞男が 1955 年 8 月の『図書』で書評をしている。丸山は、肺結核のために 1954 年から 1956 年にかけて中野療養所で療養生活を送っていた。丸山 of 読み方は思想史研究者らしく、医者としての思考様式に焦点をあてたものであった。この書評には、医学思想における思想的転回を経てたどり着いた、松田道雄 of 新しい医者としての立場性が端的に表現されている。少々長いですが、以下に引用する。

(前略) たとえその「解説」がどんなに著者のヒューマニスティックな熱情に裏打ちさ

れていても、いざ具体的にある状況に直面した際の患者にとっての指針として生きて来ないのです。それが生かされるためには、著者の思考法自体が患者に即していること——つまり抽象的な原則 of 個別的な適用ではなしに、病気 of あらゆる段階に応じて一個の人間としての患者が当面する問題や自然に湧く疑問ないし懷疑から出発することが必要です。とかく科学的な療養書にはそのようないわば「下からの」発想が十分でなく、他方どこまでも病人に寄り添って書かれた書物は科学性が低くてしばしば人生論的談義に墮するというディレンマがなかったでしょうか。私が今度の松田さん of 新著でなによりも感心したのは、病人の側からの発想を昇華させてこれを最新の医学 of 示す治療法 of 溝に流し込んでいく手際 of 鮮かさでした。これは決して単に狭い意味 of 筆の巧みさの問題ではありません。(中略) この書物には結核患者が自分の病気に対して、主治医に対して、また家族に対して抱く迷い悩み・不満・希望などが驚くほどいきいきと、しかも深い共感をもってとらえられています。<sup>(40)</sup>

丸山 of 書評 of 言葉を借用すれば、この時期 of 松田には「病人の側からの発想」や結核患者に対する「共感」が生まれていることがわかる。これまで指摘してきた、患者に対するまなざしとは違う質が生まれている。ここで問題にしたいのは、なぜこの時期にこのよう

(39) 松田道雄『結核はみんなで治そう』(未来社, 1952 年), 170 頁。

(40) 丸山眞男「松田道雄『療養の設計』」(同『戦中と戦後の間』みすず書房, 1976 年), 591—592 頁。

な医学思想における発想と論理の転回が行われたのかということである。転回に際しては、生活史的背景や時代的要素などさまざまな要因が考えられるが、ここでは松田のテキストから転回の契機となったものを指摘したい。

1956年に、松田は「人間をあつかうもの—<sup>(41)</sup>医者と裁判官」という評論を発表している。この評論のなかで、松田は「時効になった昔のはなし」として健康相談所に在籍していた時代の1937年に起きた医療事故について言及している。それは、健康相談所の同僚が、結核患者に「気胸」という外科手術を行ったところ力膜ショックで死亡した事例であった。当時の松田は同僚に対して、「医者として君の行為は最善のものであった」と何度も繰り返したという。松田自身もまたこうした医療行為が最善であることを疑わなかった。こうした医療事故を医者「良心」の下に正当化する発想は、戦後になっても変わらなかったことは先に指摘した通りである。

しかしながら、この評論では医療事故を正当化する発想に対して反省を加えている。松田は「気胸」をしなければ患者が急死することはなかったことも事実であり、トライアル的な要素があった外科手術が患者にとって<sup>(42)</sup>はたして最善の行為であったのかと自らの過去の判断に問いかけ、当時の医者としての独善性を反省している。そのうえで松田は、医者と

裁判官とは自らの下した判断によって人間の生命をも奪いかねない点で一般の職業とは区別されることを確認し、次の2点を指摘した。1点目は、判断の正当性の根拠を医者あるいは裁判官の「良心」にもっぱら委ねてはならないということであった。2点目は、裁判官や医者といった専門家の「良心」の鈍磨をみぬくことができるのは「庶民の目」だけであり、医者による自己点検を「独り善がり」にしないためには、患者自治会のような第三者による点検が必要であるということである。後者の指摘は、戦後になって患者自治会が組織されたことの思想的意味を、松田がこれまで以上に深く受けとめたことを意味していよう。

ところで、松田が医者と裁判官を並べて議論したのは、作家の広津和郎が中心となって展開した松川事件救援運動の思想的意味に触れたことが大きかった。<sup>(42)</sup>広津は、1953年から58年にかけて『中央公論』において松川事件判決批判の論陣を張っていた。広津の思想と行動が同時代の知的世界にあたえた影響は大きく、裁判の公正を要求する国民的世論を形成するにいたるものであった。

それでは、松田の主張のどの点が、広津の裁判批判の議論に触発されたのか。広津は、裁判官がいかなる政治的、利害関係のなかにあろうと、その職業倫理は事実を事実として明らかにすることにあり、たとえ裁判官が

---

(41) 戒能通孝編『日本の裁判』（法律文化社、1956年）。その後、上山春平・川上武・筑波常治編『現代日本思想体系 26 科学の思想 II』（筑摩書房、1964年）に収録されている。

(42) 広津の松川裁判に関する主な論稿は、広津和郎『松川事件と裁判—検察官の論理』（岩波書店、1964年）にまとめられている。

判決に際してどんなにか「良心」を痛めたとしても、個人の具体的な生命を奪う冤罪自体が決して正当化されることはないと主張した。この主張には、「当事者との直接的な会話にたいする絶望は、対話の可能な第三者を組織して、当事者に断絶そのものを意識させることによってしか、防衛策を生み出せない<sup>(43)</sup>」という新しい対話の立場性が表明されている。それは、コミュニケーションの「断絶」を前提とする点でオールド・リベラリズムとは異なる対話性であった。松田はこうした発想と論理に触れることで、これまでの医者と患者の対話のあり方をとらえ返すことになったのである。

1952年に書かれた『結核はみんなで治そう』のなかで松田は、「療養雑誌をよんで医者を責め、医者と仲たがいし、却って治療の条件を悪くすることは賢明でない。医者も病人も、結核にたいする人類の戦いの同じ戦列の兵士ではないか。そこでは理解と信頼のみが戦列を強固にするのである<sup>(44)</sup>」と素朴に述べているが、こうした医療行為における「理解と信頼」のあり方に松田は自己批判を加えたのである。そして、患者の生命とは医者による一方的な代弁を拒むものであり、医者「の良心」の名のもとに患者の生命を奪うことは、単純に正当化することはできないと考えるようになる。

こうした意識化は、松田に、医者と患者の関係性を非対称的な関係として認識させるとともに、医療における患者の合意の次元を

浮上させた。松田はこの段階で、患者にとっての視点から医師による医療実践の質を問う、新しい医学思想の地平に立つことになったのである。1950年代の医学思想における思想的転回を経ずして、赤ちゃんの側から育児の問題性を照射する『私は赤ちゃん』の発想と論理は生まれ得なかった。『赤ん坊の科学』の延長線上に、『私は赤ちゃん』以降の育児書の世界が開かれたわけではなかったのである。

なお、こうした医学思想における転回は、松田のなかで思想としてのマルクス主義への批評的なまなざしの生成ともなんらかの関連をもっていたことを付言しておきたい。

広津はヒューマンイズムの立場から、裁判官の観念的な「良心」が人間の生命を奪うことは正当化できないと裁判運動のなかで主張した。この主張は、革命という目的の正統性があれば人間の生命を革命に従属させても構わないとするマルクス主義の政治的プラグマティズムに対する批判として読みかえ得るものでもあった。別の言い方をすれば、広津の発言は、マルクス主義が「社会正義」の名の下に個人的目標と社会的目標との緊張関係を収斂させていることの問題性を衝くものであったといえよう。1960年代に入ると、松田は「市民的自由」「基本的人権」をキーワードに「市民主義」へと自覚的に自らの思想的立場を転換させていく。ここでの思想的転回は、自身のマルクス主義理解の反省のうえに立脚しており、反省をもたらした要因はさまざまであったが、その一

(43) 荒瀬豊「戦後思想とその展開」(『近代日本思想史講座 1 歴史的概観』筑摩書房, 1959年), 383頁。

(44) 前掲『結核はみんなで治そう』, 170頁。



つに松川裁判批判における広津の発想と論理の受容があったことは間違いないと思われる。

#### IV 松田道雄の育児思想の展開 ——1960年代

1960年代に入ると時代的要請もあり、松田は育児に関して積極的に発言する。ここでは、1960年代の松田の育児思想とその展開を素描することにしたい。

1955年から本格的に始まった高度経済成長とそれともなう都市化は、日本の育児とその環境を大きく変容させた。たとえば育児書の発行部数は、同時代的に形成されてきた都市新中間層を読者としてこの時期に急増する。1954年に出された育児書の総発行部数は1万部を超える程度であったが、1958年には22万部近く、1960年には40万部を超す勢いとなった。<sup>(45)</sup>都市における生活の消費性が問題になったのは、この時期である。子どもの病気は、「小児結核」や「疫痢」といった伝染病から「反復性へそ疳痛」といった小児神経症へと質的に変化する。松田は町の小児科医であったため、日常の診察のなかで育児に関する新しい問題群が生まれていることに気づいていた。「育児ノイローゼ」ともいうべき、母親の子育て、しつけに関する問題に遭遇する機会が増えていったのである。

松田は1956年に、総合雑誌『知性』に医学

にかかわる評論を連載していた。1956年4月号に「サラリーマンの育児」というタイトルで原稿を寄せている。この評論のなかで松田は、サラリーマン家庭を中心に、育児をサイズの問題に矮小化し、「標準の身長、標準の体重、離乳のスケジュール」といった「形式」にとらわれた育児態度が台頭してきていることに警鐘をならしている。こうした「統計」と「標準」による育児は、同時代にあって保健所主導の育児指導や「赤ちゃんコンクール」といった場面で人々に浸透していった。

しかしながら、こうした場面で使われる「統計」と「標準」は、『赤ん坊の科学』を著した戦後初期とは歴史的意味が異なった。このことに松田は自覚的であった。ここで指摘すべきは、1960年の時点で、松田は育児における「統計」と「標準」という発想が「明治から大正にかけて母おやの無知ゆえの栄養不良におちいていた赤ん坊を救うために一定の啓蒙的役割をはたしたことは否定できない」ものの、「赤ん坊にも標準があって、すべての母おやは、それにむかって努力しなければならない」というイデオロギーの支柱となっていたことも事実である<sup>(46)</sup>ことを強調していることである。そして、『私は赤ちゃん』は同時代のこうした「統計」と「標準」による「形式」的な育児に対する批判の書であったのである。以下では、この批判の位相について検討したい。

---

(45) この数字は、『暮らしの手帖』第57号(1960年12月)の特集「育児ノイローゼ」からのものであり、前掲『可能性としての「戦後」』、188頁より引用。

(46) 松田道雄「『私は赤ちゃん』の読書カードをみせてもらって」(『図書』128号、1960年5月)、28-29頁。

『私は赤ちゃん』は、1960年に岩波新書として出版された。もともとは、1959年初夏と冬の2度にわけて『朝日新聞』朝日新聞大阪本社の学芸部の西村勇から「赤ちゃんの立場から親たちに注文するようなものを書くように」と依頼され、『朝日新聞』大阪版に連載したもので、好評につき後に加筆して単行本化したものである<sup>(47)</sup>。その書き出しは「私はおととい生まれたばかりである。まだ目は見えない。けれども音はよく聞こえる。この産院でおこるいろいろのことも、<sup>(48)</sup>気配でわかる」というものであった。『私は赤ちゃん』は、夏目漱石の『吾輩は猫である』に着想を得て、執筆されたものであった。

『私は赤ちゃん』は、私である「赤ちゃん」を主語にすえた叙述スタイルと育児の対象とされがちである「赤ちゃん」の側から育児を照射する方法に特徴があった。こうした発想と方法こそ、1950年代の思想的転回が用意したものである。というのも『私は赤ちゃん』は、母親の「良心」の無自覚を子どもの立場を代弁する小児科医の視点から批判するというスタイルで書かれている。ここでは、小児科医である松田は、母親と子どもの育児というコミュニケーションを批判する第三者として顔を見せているのである。前節で言及したように、『私は赤ちゃん』に見られる啓蒙のスタイルには、松田の医者としての新しい対話性を確認することができる。

松田は、こうした啓蒙スタイルで母親と子どものコミュニケーションをゆがめるものを批判した。本書での批判の対象は、母親の「良心」を利用し、赤ちゃんの立場を軽視して利潤を追求しようとする育児産業であり、保険点数を稼ぐために保健医にとって必要な注射をする医者<sup>(49)</sup>の業界であった。そして、本書のなかで繰り返し批判されるものが「サラリーマンの育児」でも問題となった「統計」と「標準」にとらわれた形式的育児であった。『私は赤ちゃん』には、保健所の定期相談で保健婦が赤ちゃんの体重が標準を下回っていると「ママ」に注意したことで、赤ちゃんの体重を増やすべく、ママが熱心に「私」に離乳食を食べさせようとする場面が出てくる。そこで「私」である松田は、つぎのようにいう。

私のいいところをちっとも考えてくれないで、目方だけ平均に及ばないからだめだとは何ごとだ。

赤ちゃんの健康相談だったら、赤ちゃんの健康を、その動きによって、もっとみてくれないとこまる。赤ちゃんの顔をみたら、それが何カ月になったかをきいて、何ヶ月ならこれだけの目方がないといけないという相談だったら、何も生きた人間が指導する必要はない。自分が赤ちゃんの月齢の番号の入ったテープレコーダーをまわしてきかせれば<sup>(49)</sup>いい。

また別の箇所では、松田は「ママ」をして

(47) 松田道雄『私は赤ちゃん』、(岩波新書, 1960年), 188—189頁。

(48) 前掲『私は赤ちゃん』, 2頁。

(49) 前掲『私は赤ちゃん』, 63頁。

「だいいち、あの標準離乳表っての、お医者さんだの、保健所だのが、ほんとうに自分の家庭の経験からわり出したかどうかってことだわ。あれは子供を自分で育てたことのない人がつくったものにちがいない<sup>(50)</sup>」と語らしめている。育児の対象である赤ちゃんの視点に立つと、「サラリーマンの育児」にみられる形式的育児は、育児という経験的な一回性の行為を、テープレコーダーのような単純に反復する機械的行為に還元しているように松田には思われた。「統計」と「標準」の育児に対して経験主体の固有性を認める育児は、赤ちゃんの個性を尊重する育児として松田には理解されていた。ここでの個性の尊重とは、人間の自然や生理的欲求に即して子どもを育てることを意味していた。こうしてみると、『私は赤ちゃん』は、赤ちゃんの側から母親に対して不自然な育児をしないように警鐘をならしたものであったといえよう。

とはいえ、高度成長下の日本社会では、育児文化における経験の継承が困難な状況が急速に生まれていた。それにともない、テレビやラジオ番組での育児に関する情報量が増大した。『私は赤ちゃん』で批判した、親が子どもにかまいすぎて、子どもに必要な自然の環境を失わせ、異常な成長を強いることになる

「育児過剰」の問題は解決するどころか、深刻になる一方であった。松田にとってこのような時代経験は、これまで意識化してこなかった育児という営みの根源的な性格を見つめなおす契機となっていた。

そうしたこともあり、1960年代に入ってから、関西保育問題研究会に参加し、「あたたかい家庭のなかで、世の荒波からまもりながら幼児を大きくしたいという牧歌的な思想は、今日、その現実の基礎を失いつつある<sup>(52)</sup>」という認識に立ち、家庭の社会化機能を補完するものとして集団保育を積極的に提唱する。他方で、育児に対する民俗的な関心が松田に芽生えて、それを探求するようになる。前者の保育思想については改めて議論することとし、ここでは後者の展開について言及しておきたい。

1964年に、松田からの提案で毎日新聞に「日本式育児法」を連載する。後に講談社現代新書にまとめられたが、そこでは江戸時代の育児学にまでさかのぼり、香月牛山の『小児必用養育草』、貝原益軒『和俗童児訓』を現代に通じる育児書として考察する一方で、毎日新聞の記者の案内で、大阪や京都の旧家、河内の山奥にでかけ「おばあちゃん」から聞き取りをした育児経験や知恵を紹介している。松

(50) 前掲『私は赤ちゃん』、149頁。

(51) こうした松田の育児思想における自然主義には、小児科医で明治の医学者である平井毓太郎やフランスの啓蒙思想家ルソーの思想的影響が見られる。だが、こうした育児思想が、計画的な避妊を通じて少産化を実行し、子ども産むというような「生理」を操作の対象とする身体感覚を有した高度経済成長期の主婦に対してどこまで説得的でありえたかについては別の問題として議論すべきことであろう。

(52) 松田道雄「日本の保育環境」(『岩波講座 現代教育学 15 子ども生活と道徳』岩波書店、1961年)、157頁。

田は「添い寝はいけない」、「夜間授乳は避けよ」、「離乳はできるだけ早期に」といった西洋式育児法に振り回されていることが、若い母親の「育児ノイローゼ」の原因であると本書のなかで述べている。西洋式育児は、日本の気候、風土からすると不自然なものであり、それに対して「日本の育児の風習」を発掘し、復活させようと試みたのである。

ただし、ここで着目すべきは、1960年代半ばの段階において松田の風土や習俗への関心は、近代ならびに近代医学そのものを問いなおす議論へとつながらなかったということである。それは、どこまでも近代的な立場からの関心であったといえよう。松田は「日本の風俗・習慣のなかには、まじない（呪術）によってゆがめられたところが少なくありません。西洋医学をくぐってきた私には、それを見抜くことのできる近代の目があるかと思えます<sup>(53)</sup>」と述べている。

おそらく、こうした「日本式」育児の再評価は、桑原武夫流の「近代化論」の視点からする明治の文化的遺産への積極的な評価の動向と連動していた。松田の民俗学的関心はともすれば、「日本式」というかたちで民族的関心に接続される側面があった。この点は、知識人の思想として見た場合には見逃すことはできない。またここに、都市新中間層の子どもとして身につけた教育経験の志向性の影を見ることもできよう。

松田は1950年に平和問題懇話会を通して

桑原を知り、それ以降、親密に交流していた。1960年からは、桑原が中心となってすすめた京都大学人文科学研究所の共同研究「ブルジョワ革命の比較研究」に参加している。講座派マルクス主義の歴史観の見直しを軸にすすめられたこの共同研究のなかで、松田は「日本およびロシアの初期社会主義—ゲルツェンと北一輝<sup>(54)</sup>」という論文をまとめている。そこで松田は、自らが身につけた福本イズム以降のマルクス主義とその背後にあったスターリン主義を、明治期の初期社会主義との対照で位置づけて議論を展開している。松田は明治社会主義の土着性と倫理性を高く評価し、それとの対比で「昭和マルクス主義」の思想としての欠落を指摘した。こうしたマルクス主義経験の総括が持つ松田にとっての意味は、別に検討すべき論点である。ここでは、育児思想における松田の民俗学的関心と知識人としてのマルクス主義経験の総括に共振関係があることを摘示しておきたい。

#### おわりに

本稿では、松田道雄の医学・育児思想における発想と論理を1940年代、50年代、60年代と時期区分をして大急ぎで概観した。もとより、松田によって書かれたテキストを題材にして素描したに過ぎない本稿には限界は多い。松田の医学思想を考えるうえでは、1970年代以降の検討も欠かすことができない。医

(53) 松田道雄『日本式育児法』（講談社現代新書、1964年）、19頁。

(54) 桑原武夫編『ブルジョワ革命の比較研究』（筑摩書房、1964年）。

学思想にとって思想家の死生観は着目すべき重要な点である。松田は1979年6月に「安楽死法制化を阻止する会」の結成に参加しており、晩年には『安楽に死にたい』（岩波書店、1977年）を出版し、独自の死生観、生の自己決定論を展開している。また、松田の医療実践を優生学を含む同時代における医学思想との関連のなかで位置づけることは今後の課題として残された。育児思想の検討については、松田のジェンダー観や家族意識を参照することは不可欠であろう。限界は以上に留まらないが、本稿に意味があるとすれば以下の指摘にある。

本稿の素描から明らかになったことは、『私は赤ちゃん』に代表される1960年代以降の松田道雄に固有の育児思想の前提として、1950年代の思想的転回が重要な意味を持っていたということである。鹿野政直は、松田道雄の小児科医としての姿勢を「「治療の前提は医者と患者の相互信頼」との信念から、その子の

問題を環境も含め全体として把握しようとした<sup>(55)</sup>」として評価している。こうした小児科医としての姿勢は、医療行為における医者と患者の非対称的な関係性を自覚し、患者にとっての視点から医療を問いなおす1950年代の経験なくしては生まれなかった。このことが本稿の議論が提示する重要な論点である。60年代以降の松田道雄像の前提を問い直したという点で、本稿はこれまでの松田道雄論に対する問題提起となっていると考える。ただし、50年代の思想的転回の契機は松川事件の思想的影響のみで説明がつくものではなく、さまざまな契機があったことはいうまでもない。今後の課題を端的に言えば、戦後社会史・思想史のなかで松田道雄を歴史的に位置づけることであり、本稿はそうした作業に向けての第一歩であった。

（高崎経済大学・法政大学非常勤講師）

---

(55) 鹿野政直『日本の近代思想』（岩波新書、2002年）、212頁。